

『和歌初学抄』の名所記載

田 尻 嘉 信

一

名所に対する歌論上の認識は、平安末期に劃然とした様相を呈するようになった。公任・能因を承けて、歌の表現に機能する名所の意義が確認されたのである。「歌枕」の語が題材として詠まれる名所そのものと解されたのは、進展の一端である。『俊頭髓腦』に、「世に歌枕といひて、所の名書きたるものあり。それらが中に、さもありぬべからむ所の名をとりて詠む、常のことなり」とある。技法との関連で説かれ、引用歌註にも所在・景物に触れる部分がすくなくない。

その後、歌語註に『綺語抄』が簡単に所見は限られるが、天象・時節以下の一七部門中に、坤儀部・水部・海部(上巻を置いている。『和歌童蒙抄』では歌語の分類も二二部門に増え、名所関連は地儀部第三となり、土・国・山・嶺以下の三七項に細分された。他の部門にも、引用歌による名所註が多少ながらみられる。

また歌語の視点ではなく、歌に注目して名所和歌集の体とした『五

代集歌枕』の例もあらわれる。地儀関係の細分は山以下、四九項とさらに進み、『万葉集』一〇四七首・『古今集』二三〇首・『後撰集』二七〇首・『拾遺集』一三八首・『後拾遺集』一九八首の計一八八三首が収められている。『万葉集』が群を抜いて多い。したがって書名の「歌枕」は、ただ歌に詠まれた限りの地名を一義としているようである。『古今集』以降、とくに表現上の機能に着目、名所としての普遍化された事情の反映は薄い。その点は上来の歌書にも同じ傾向がみえ、歌註・歌語註はことの性質上、『万葉集』を除外するのがむしろしかったようである。

名所の流布は、視野を転ずると『梁塵秘抄』にも明らかな投影がみられるが、正統の歌の世界における認識はほぼ右の経緯をたどっている。『和歌初学抄』(以下、初学抄)に至って、ようやく和歌作法の要事として名所そのものが、内容分類の項目名にあげられた。「所名」「万葉集所名」「読習所名」「両所ヲ詠歌」の四項である。ことに「万葉集所名」が別の一項とされたことに、新たな認識の一端がうかがわれるようで

ある。小稿では「所名」「読習所名」の二項について、その実情を検証してみたい。

二

『初学抄』は、仁安年中(一六六)に成ったとされる『和歌現在書目録』の末尾に、「和歌初学抄」とみえている。現存本は、しかし嘉応元年七月(六九)に、清輔が摂政松殿基房の命によって献じたものである。それ以前の成書を抄出したともみられている。内容は巻頭に序があり、本文は古歌詞・由緒詞・秀句・諷詞・似物・必次詞・喻来物・物名と続き、そのあとを名所関係の四項が承けて、都合一二項目となっている。惣じて『万葉集』『古今六帖』『古今集』以下の勅撰集、また『伊勢物語』『大和物語』などの先行文献を仰いで、詞句を引き、加註・証歌に及ぶ。名のとおり、和歌初学のための要訣を記した一書と思われる。その初学の体系の中で、名所関係が全体の項目の三割を占めているのは注意されている。名所に触れる箇所は秀句・喻来物・物名にもみられ、それへの好尚と慣用とが、歌の表現に大きな意味をもってきていたのである。

はじめに、名所関係四項の大略を述べると、「所名」は山以下二四項に細分、四〇七ヶ所が配され、簡明な註が施されている。「万葉集所名」には、山以下一九項、一五八ヶ所が載っている。「読習所名」には霞以下の景物二二をあげ、関連の名所六八ヶ所(重出三)が配されている。「両所ヲ詠歌」には山以下一五項、一三九首が採られている。

「万葉集所名」は当然ながら、「両所を詠歌」の場合も万葉歌が八五首と過半を占めている。地名使用の比率が、『万葉集』に著しいとの事実によるのであろう。定着度から名所としての当否は問題となるが、始源の『万葉集』の影は大きい。ただし、「所名」「読習所名」の二項については、『古今集』以降が当面の関心となっているようである。加註には明らかにその反映があり、時代の趨勢がうかがわれる。名所関係四項の中で、本命とされるのである。

さて、「所名」は上記のように二四項、四〇七ヶ所である。その四〇七ヶ所は大体、畿内七道の区分に従って排列されている。『日本歌学大系』本によって仔細をみると、記載に多少疑義のあるものがある。

第一は所在国名の錯誤である。例えば、陸奥「あをば(青羽)の山」は、「水島ノアラバナドニソフ」(古今六帖三二七・三三八/仲実 903)の加註によれば、若狭(五代集歌枕八雲御抄)とするのが妥当か。また紀伊「いもせ

(妹背)山」には、「山フタツアリ、イモトセノ山トモ、中ニヨシノガハナガル、ヲトコ女ノコトニソフ」と註される。たしかに同名は紀伊(能因歌枕、五代集歌枕八雲御抄) 544 1195 1209 1210 1247 / 古今六帖三三二・三三三(三)にあるが、

この註では大和(古今不知828)になる。二ヶ所にあるための錯誤で、『奥儀抄』(中、釈、後)は所在に触れないが、『袖中抄』(第二)の記載にも混乱が生じている。『八雲御抄』は、万葉歌を証に紀伊をあげ、背山(古今六帖三四七・三四八)と

の関係で「別山歟、吉野川中におつ」とも註する。次に河内「ふたかみ(二上)山」は、「ハコニソフ」(金葉161)の註によると大和と解される。『五代集歌枕』『八雲御抄』は、ともに万葉歌(大和 1098 2185 2668 /

越中 401 3882 3954 3993 4013 4206 4239) を証に大和・越中に分けている。相模「たはれ

(戯) 島」も、「アダナルコトニ」(伊勢物語 後撰 1121 同 1352) の註によれば、肥後(八雲御抄)ということになる。このように加註を俟つまでもなく、誤断の知られる場合もある。河内「いこま(生駒)山」は、大和

(能因歌枕、五代集 歌枕、八雲御抄)である。尾張「ふたむら(二村)山」は『能因歌枕』も

同国とするが、正しくは三河(五代集歌枕、八雲御抄)である。尾張「ふたむらの里」も、同様に三河となる。ついで摂津「みつ(美豆)の御牧」は『五代

集歌枕』が同国とするが、山城(八雲御抄)が妥当である。

第二は、道制による排列に乱れのみえることである。例えば、相模

「はこね(箱根)山」↓近江「ながら(長等)の山」↓常陸「つくば(筑波)山」↓上総「おとづれ(音信)山」↓近江「かがみ(鏡)山」と続いている。当然、相模↓上総↓常陸/近江↓の順となる。また美乃「つきよし(月佳)の里」↓播磨「しかま(飾磨)の里」↓信

乃「さらしな(更科)の里」↓陸奥「しのぶ(信夫)の里」↓同「あさか(安積)の里」↓同「なとり(名取)の里」↓播磨「おきいの里」となっている例もある。これも美乃↓信乃↓陸奥/播磨↓の順と

なる。これらの名所の所在国名に誤りはない(播磨「おきいの里」は未詳)。

第三に様態・景観の上で、分類項の適否が問われるような例もある。例えば、山の「すえ(末)の松山」(陸奥)は、原付松の項が適当のようでもある。ほかには野の「みくま(三熊)野」(紀伊・河の

「白河」(陸奥・崎の「はこぎき(箱崎)」(筑前)・雑の「かひのしらね(甲斐の白根)」(甲斐)などがある。中で「白河」は誤認、関に「白河

関」(陸奥)があるのでこと足りているようである。『八雲御抄』は関

に「白河関」、根に「甲斐が根」を採っている。あとの各条は、『初学抄』を襲った記載となっている。これらも所在国名に誤りはないが、やや釈然としないものがあるようである。

以上の三点が「所名」に気づかれる。その中、余儀ない国界認識の不確さによる誤認を正して、所在国名・分類項の二軸で区分してみる

と次表のようになる。妹背山は大和、同所例の中で初瀬山・小初瀬山は一所をあげ、河の白河(陸奥)は除いた。

山岡原野杜関牧駅滝河池江沼渡海浦浜崎島橋郷井神雑／									
山城 21	4	6	13	1	4	19	3	2	7
大和 19	4	1	11	5	2	2	3	2	49
河内 1	1	1	1	1	1	2	6	5	
和泉 2	1	1	5	4	5	1	5	4	2
摂津 3	2	1	2	1	1	1	5	4	2
伊賀 1	1	1	4	1	2	1	1	1	42
伊勢 1	1	1	4	1	2	1	1	1	11
志摩 1	1	1	1	1	1	1	1	1	2
尾張 1	1	1	1	1	1	1	1	1	3
三河 2	1	1	1	1	1	1	1	1	6
遠江 1	1	1	1	1	1	1	1	1	3
駿河 2	1	1	1	1	1	1	1	1	5
甲斐 1	1	1	1	1	1	1	1	1	8
相模 1	1	1	1	1	1	1	1	1	4
上総 1	1	1	1	1	1	1	1	1	2

紀伊	2	1	1	1	2	3	1	1	2	14
淡路							2			2
讃岐	1			1	1					3
伊予							1			1
筑前	1	1	1	1		1				6
筑後		1		2						3
豊前								1		1
肥前						2	1			3
肥後			1							1
大隅	1									1
分類項	83	7	11	19	23	15	7	2	6	59
	17	7	3	3	9	21	13	6	22	16
	27	5	11	13						
	405		1							

分県項は山八三が断然、最多となっている。以下は川五九・郷付郡二七・杜二三・島二二・浦二一・野一九・池一七・橋一六・関一五の順となっている。上位の山・川にかなりの段差はあるものの、両者が双璧とされるのは名所撰の通例といい。撰集・定数歌の名所例の場合も、ほぼ同様である。現存最古の名所撰を載せる『能因歌枕』⁽¹⁾は、所在未詳がはなはだ多いが、上位一〇例をあげてみると次のようになる。山一四二・川七九・里四六・浦四五・杜四五・島三三・野二二・関一八・橋一七の順である。両書の順位にわずかな変動はみられるが、分類項は共通している。名所に寄せる関心が、これらによって代表されるといえるのであろう。

次に所在分布の国名では、山城八三が次位の大和四九をはるかに超えている。続いては摂津四二・陸奥三〇・近江二八の順となっている。

る。この上位五国も、伝統的なものである。山城に比して万葉大和の減衰はすでに『古今集』にあわれ、以後の歌界に定着している。技法上の要請も絡んで、それが摂津・近江・陸奥以下遠近諸国への視野を拓いたといえる。とくに、未知・未開の部分のすくなくない東国系の名所が珍重される傾向を示した。

そこで、『初学抄』名所群を畿内七道の区分によって比較すると、次のような表になる。参考までに『能因歌枕』と較べてみたい。この先行書は六七八ヶ所を載せるが、所在誤認・重出・非名所が目だつので、一応妥当とみられる実数を六五五としてある。

初学抄		能因歌枕	
畿内	185	178	
東海	61	125	
東山	85	121	
北陸	10	52	
山陰	15	32	
山陽	14	43	
南海	20	39	
西海	15	65	

両書の掲載数の相異から差が開くのは当然ながら、まず注目されるのが畿内である。数は、むしろ増えている。内情をみると、『能因歌枕』は畿内の場合には、未詳の部分がかなり目につく。山城八六の中に二六、大和では四三の中の一一、河内一四の九、和泉五の二、摂津三五の一四が未詳である。未詳が多いためにあって、両書の符合比率

は低く、四割ほどである。『初学抄』では、未詳の部分はごくすくない。畿内では三ヶ所程度である。したがって『初学抄』では、新たに着目された部分が多くを占めたことになる。先行書の不備で不確実な要素が払われ、和歌史の経緯に即して収載された趣である。東海以下、畿外は激減しているが、それだけ精選されたといえるであろう。陸奥を例にとると、『能因歌枕』では四二で、その中の一九が未詳である。『初学抄』の未詳は一で、両書に共通するのは一〇となっている。畿外では、とくに未詳部分が濾過され、確かさが増しているようである。そして全体的には、東海・東山に北陸を加えて、東国系へと関心の傾いていることがわかる。それを基本としつつ、畿内・畿外ともに名所撰としての実質を整えてきたのである。畿内、中でも京師を中心とする一廓は、もっとも充実を示した好例である。その点を念頭に、続いては具体的に名所群の実態に融れることにしたい。

三

「所名」の各条には、前述のように簡略ながら註解が施されている。顕昭『古今集註』の逸文から能因の佚書『坤元儀』にも加註のあったことがわかるが、知られるのはわずかである。それだけにこの名所註は、先行の歌語註と較べてもなかなか当を得た集成といえる。

ただ、中には註を欠く条もある。それは五九条あり、内訳では岡一・原付松四・野四・杜一・関二・牧三・河九・池一・江二・海五・浦三・浜二・崎二・島七・橋二・郷付郡五・井一・神付宮六・雑四となってい

る。これを分類項の順にあげると、春日野・み吉野・不破関・白河関・美豆御牧・淀河・白河・賀茂河・清滝河・芹河・堀河・三島江・難波江・伊勢海・生田海・淡海海・御津浦・伏見里^(山城)・安積里・明石瀬戸などのように知名とみられるものが多い。大部分が京畿の周辺であり、省筆ということにもなるが、反面必ずしも知名とはいえないものも含まれている。榴岡^(陸奥)・狭野松原^(和志)・日根松原^(同)・こひの松原^(若狭)・矢田広野^(陸奥)・黒駒牧^(甲斐)・小笠原牧^(同)・河^(山城)・原池^(摂津)・かすみの崎^(武蔵)・與謝大島^(丹後)・豊浦小島^(長門)・さいはひの橋^(伊勢)・あさむつの橋^(飛騨)・甲斐御坂^(甲斐)・七栗湯^(信乃)・子安社^(近江)などである。この中では榴岡^(古今六帖三一九八)・黒駒牧^(堀河百首河内784)・小笠原牧^(古今六帖・貫之三〇五五)・七栗湯^(後拾遺相模643)・原池^(後拾遺孝善422)、また豊浦島^(集因101)とみえる豊浦小島の六ヶ所が先例をもっているだけである。それに『能因歌枕』に載るこひの松原・黒駒(山)を除くと、あとは『初学抄』初出ということになる。当然、何らかの加註があつていいように思われる。

ところで、大部分の条にみられる註解は、いうまでもなく先例に負うところが大きい。内容的には一様でなく、幾つかに区分される。順次あげてみると、(a)所在を明らかにする・(b)同所にある他の名所に触れる・(c)別称をあげる・(d)景物を示す・(e)技法上の関連を説くなどの各項になる。しかし、これらが純然たるかたちをとることはすくなく、複合的に示されている場合が多い。以下、個々に実例をあげてみる。

(a)は、もっとも基本となる所在の確認である。

山城 あさひ山(朝日山) 宇デニアリ

同 あはた山(栗田山) 山シナノカタ也

同 みつ野(美豆野) ヨドノ方ナリ、河チカシ

撰津 すまの関(須磨関) ハリマサカヒナリ、海辺ナリ

などの各条である。先例には、それぞれ次のような歌がある。

風さむみ冬の夜すがら置く霜のあさひ山にはとけやしぬらむ^(堀河百首)

永縁 924

あはた山こゆともこゆと思へどもなほ逢坂ははるけかりけり^(古今六帖)

三七七

とりつなげ美豆野の原の放れ駒よどの川霧秋ははれせじ^(金葉八三〇長能)

237

淡路島かよふ千鳥の鳴く声にいく夜ねざめぬ須磨の関守^(金葉288兼昌)

(b)の場合も、数はそれほど多くない。

大和 かづらき山(葛城山) クメジノハシアリ、ヒトコトヌシ

トイフ神マス

撰津 ゐな野(猪名野) コヤノイケアリ、ササアリ、アシハラ

アリ

近江 あふさかの関(逢坂関) ハシリキアリ、カケヒノミヅア

リ、セキノシミヅトモ

先例には、次のような歌がある。

しもとゆふかづらき山に降る雪のまなく時なくおもほゆるかな

(古今
大歌所御歌 1070)

かつらぎやくめちの橋にあらばこそ思ふ心を中空にせめ(後撰 775)

かもめこそよがれにけらし猪名野なるこやの池水うはごほりせり

(後拾遺
長算 420)

有馬山ゐなの笹原風ふけばいでそよ人を忘れやはする(同 三位 709)

逢坂の関しまさしきものならばあかずわかるる君をとどめよ(古今 万男 374)

逢坂の関の清水に影みえていまかひくらむ望月の駒(拾遺 170)

(c)にあたる例は、もっともすくない。

山城 をとこ山(男山) 八幡山ナリ

越前 白山 ユキフカシ、コシノ白山トモ、コシノ大山トモ

甲斐 かひのしらね(甲斐白根) カヒガネトモ、ユキニモ

先例には、次のような歌がある。

をみなへし憂しとみつつぞゆきすぐる男山にしたてりと思へば

(古今
今道 227)

消えはつる時しなければ越路なる白山の名は雪にぞありける(躬恒 414)

414

いつかたと甲斐のしらねはしらねども雪ふるごとに思ひこそやれ

(後拾遺
紀伊式部 404)

かひがねをねこし山こしふく風を人にもがもやことづてやらむ

(古今
東歌 1098)

(d)は名所にとって基本となるものである。名所は景物との相関によ

って普遍化したといえる。「所名」各条の所見にも、多くの例解が示されている。

山城 いなり山(稲荷山) 神マススギアリ

大和 春日山 マツ、フジアリ

同 たつた山(立田山) ニシキ、ナミ、コロモ、カスミ、ナキ

ナタツタトソフ

稲荷山には、次のような例がある。

いなり山みつの玉垣うちたたきわがねぎごとを神もこたへよ(拾遺 1168)

1168

いなり山すぎのむらだちおしなべてこのもとごとにくるよしもが

な(古今六帖 三二七六)

春日山での先例は、

春たつと聞きつるからに春日山消えあへぬ雪の花とみゆらむ(後撰 2)

2

との一首である。加注の松・藤では次の二首がはい。

ふたばよりのたのもしきかな春日山こだかき松のたねぞと思へば

(拾遺 267)

春日山おなじき氏のやどなればわきても藤の花は咲きける(堀河百首 282)

282

立田山には、次のような歌がある。

いもがひもとくとむすぶと立田山いまだ紅葉の錦おりける(後撰 1098)

たがみそぎ夕つけ鳥から衣たつたの山におりはへて鳴く(古今 995)

わたつ海の沖の白波たつた山いつかこえいでて妹があたりみむ
(古今六帖 三三九三五)

なき名のみたつたの山のさねかづらくる人ありと誰かいふらむ
(同 三四七三三)

また従来の景物ながら、それへの見方の変化がとらえられている場合もある。

信乃 さらしな山(更科山) 月メデタシ

次の一首である。

いづこにも月はわかじをいかなればさやけかるらむ更科の山(堀河百首 隆源 797 千載 276 秋上 276)

月の賞美は、『古今集』(雜上 878 不知)と明らかな相異をみせている。なお姨捨山でも隆信(千載 277 秋上)が初見となる。

(e)は所名に固有な表現機能への着目である。修辭の上に斬新を求めて、次々に新たな名所がみいだされ、その試みも様々であった。名所好尚の始源とみられる。ただ時勢とともに、ことばの次元での多用には、変化も兆しているが、加註の中でこれをもっとも多い。

(f)枕詞的に機能する例として、

山城 おとは山(音羽山) オトスルコトニソフ
 との記載がある。次の一首である。

音羽山おとにききつつ逢坂の関のこなたに年をふるかな(古今 473 元方)

(g)序を構成する場合の例として、

遠江 さやの中山(佐夜中山) ナカナカニトソフ

との記載がある。名所の音を活かして、同音反復の序とするのである。次の一首がある。

東路のさやのなかなかなかに何しか人を思ひそめけむ(古今 594 友則)

同じように序を構成するが、名所の喚起する景状からの譬喩的な連想の導かれる場合もある。

大和 よしの河(吉野河) ハヤシト

次の一首である。

吉野川岩波高くゆく水のはやくぞ人を思ひそめてき(同 471 貫之)

(h)名所のもつ音から、懸詞的連想を軸とする用法がある。この類いは例が多い。

山城 かざとり山(笠取山) カサキルニモソフ、又トラルルニ

モ

次のような歌がある。

雨ふれど露もらじを笠取の山はいかでもみじそめけむ(古今 261 元方)
 うちかづく笠取山のしぐれには袂ぞぬるる人などがめそ(堀河百首 898 匡房)

(i)同様に懸詞的な連想に基づくが、ある事物を髣髴する例として、

近江 かがみ山(鏡山) ケフゾミル
 この場合は「鏡」であり、次の一首がある。

かがみ山いざ立ちよりてみてゆかむ年へぬる身は老いやしぬると

(古今 899 不知)

(j)譬喩的にある観念を托して用いる場合がある。

大和 あすか河（明日香河） ケフゾワタルトモ、フチセカハル

トモ

次のような歌である。

世の中は何か常なるあすか河きのふの渕ぞけふは瀬になる（古今 933）
ふちは世になりかはるてふあすか河わたりみてこそしるべかりけ
れ（後撰 751）
（元方 751）

（ハ）心情、あるいは想念を示唆する場合である。

山城 鳥べ山（鳥部山） ハナカキコトドモアリ

大和 あまのかご山 ヒサシキコトニソフ

前者は洛東の葬所で歌合（八雲御抄正義 部・可憐名所）には避けられたが、それが制約となつて陰翳のある心情へと導かれる。

はれずこそかなしかりけり鳥部山たちかへりけるけさの霞は（後拾遺 拾

小従 545）

後者は往古よりの変ることなき山容が、悠久なるものへの共感となる。古例はないが、次の一首などがそれにあたる。

君が代はあまのかご山いづる日の照らむ限りはつきじとぞ思ふ

（千載 大宮前太政大臣 608）

このように加註は各様各態ながら、名所の効用を充分に活かす方途が講じられている。仔細にみると、記載の名所には同所、または重複感のあるものも多少みられる。その場合に、例えば、

(1)山城 宇治山 ヨヲウヂヤマナドソフ（古今 983）

同 宇治橋 ハシヒメヨメリ（同 689）

(2)大和 葛城山 クメデノハシアリ、ヒトコトヌシトイフ神マス

（拾遺 1199）

同 葛城橋 クメデノハシ、イハバシナドヨム、中タエタリ

（後撰 987）

同 葛城神 ヒトコトヌシトモ、アクルワブルヨシナド（拾遺 春宮女蔵 人左近 1201）

（人左近 1201）

などでは、相互の固有性が註解にあらわれている。しかし、次のように必ずしも弁別のしがたい場合もあり、この方が例は多い。

(1)摂津 たまさか山 マレナルニソフ（六条宣 76）

同 たまさかの池 アフコトハタマサカナド（和泉式部 144）

(2)信乃 更科山 月メデタシ（前述）

同 姨捨山 同（前述）

同 更科里 ヲバステ山ノフモト、月ニヨムベシ（風情 75）

(3)陸奥 信夫山 シノブルニソウ（伊勢物語 一五段 三二七四三）

同 信夫浦 コヒニシノブト（新古今 971）

(4)摂津 生田杜 イノチノイクニモ、又ユクニモ（古今 6帖 三一三三〇）

同 生田池 イノチノイクタナド（拾遺 894）

(5)山城 櫃川 アケクレタエズナド（古今 6帖 三三四五二）

同 櫃川橋 アケクレワタルナド（五社 百首）

これは同名名所の場合にも、共通する。

(1)伊勢 二見浦 タマクシゲニ（金葉 580）

播磨 同 ハコニ（兼輔 471）

(2) 撰津 長居浦 ヒサシクキルニ(堀河百首 787同 肥後 1358同 師頼 1589)

山城 長居里 同(所在未詳 歌例欠)

などとなっている。名所の観念的な一面があらわれている。やはり名所撰としては、名所の採否・加註に勘考の余地がありそうである。

そこで続いては、これらの名所の典拠について、初出の撰集・定数歌などを明らかにしてみたい。撰集・定数歌ごとに、個々の名所をあげてみると次のようになる。

古今集

因幡山 妹背山 宇治山 小倉山 小塩山 逢坂山 男山 音無山 音羽山 姨捨山 埽山 鏡山 笠取山 葛城山 神奈備山 吉備中山 久米皿山 佐保山 佐夜中山 末松山 立田山 筑波山 手向山 深草山 富士山 三室山 三輪山 守山高砂松 春日野 飛火野 宮城野 武蔵野 み吉野 神奈備杜 逢坂関 望月牧 音羽滝 明日香河 阿武隈河 天河 泉河 宇治河 大井河 音羽河 佐保河 白河 立田河 名取河 初瀬河 最上河 吉野河 淀河 大沢池 住江 堀江

安積沼 伊香保沼

伊勢海

明石浦 塩釜浦 須磨浦 二見浦(播磨) 興津浜 小余緩(越) 高師浜 名草浜 吹上浜

伊加賀崎

田蓑島 玉津島

宇治橋 長柄橋

更科 長居里(撰津)

山井

差出磯 野中清水

後撰集

会津山 小泊瀬山 春日山 鞍馬山 鈴鹿山 長等山 二村山

真土山 三笠山 耳成山

武隈松

印南野 宇陀野 交野

磐瀬社 羽束師杜 美豆杜

足柄関 衣関 勿来関 不破関

賀茂河 桜河 芹河 染河

雙池

玉江(撰津)

近江海

生田浦 田子浦 御津浦

戯島 松浦島(陸奥)

離島

葛城橋 八橋

信夫里 伏見里(山城) 都留郡

拾遺集

愛宕山 嵐山 竈山 龜山 位山 更科山 千歳山(出羽) 鳥部

山

生松原

大原野

子恋杜

白河関

吉野滝

芥河 梅津河 竹河 田上河 玉河(摂津) 富緒河 野洲河

生田池 猿沢池 益田池

難波江

志賀須賀渡

袖浦(出羽)

打出浜

箱崎(筑前)

淡路島 浮島(陸奥) 三島(摂津)

木曾路橋 浜名橋

名取(郡)

走井

葛城神 筑摩社(近江) 布留社

甲斐白根 辰市

後拾遺集

有馬山 生駒山 大原山 小野山

猪名野 嵯峨野 紫野

生田杜 老蘇杜 信太杜 柞杜

宇留馬「初学抄」の宇留馬関の先例なし ✓

中河 御裳濯河

昆陽池 原池

三島江(摂津) 筑摩江(近江)

錦浦(志摩) 和歌浦

有度浜

緒絶橋

玉河里(摂津) 豊浦里 山科里

亀井

住吉社

金葉集

糸鹿山 初瀬山 二上山

あふの松原

万木杜(近江)

清見関 須磨関 門司関

戸無瀬滝 布引滝

糸貫川 音無河（紀伊） 清滝河 堀河

余吾浦（但「初学抄」の余吾海は先例なし）

二見浦（伊勢）

飾磨（但「初学抄」の飾磨里は先例なし）

明石瀬声 天橋立 朽木杣

古今六帖

安積山 天のかご山 栗田山 有乳山 稻荷山 伊吹山 大江山

音無山（紀伊） 信夫山 箱根山 花園山

榴岡 船岡

三熊野

生田杜 石田杜 気色杜（大隅）

美豆御牧

会津河 妹背河 桂河 櫃河 耳敏河 水生河（大和） 三輪河

奈古海（丹後）

吹飼浦 三熊野浦

雪白浜

浦島 川島（摂津） 豊島（同） 松島

堀兼井 有馬御湯 室八嶋

堀河百首

青羽山 朝日山 神山 賤機山 信夫山 鳥籠山 待兼山

手間関

菅田池

諏訪海

形見浦（但形見浜は先例ない） 白良浜 千尋浜

伊良湖崎

幸橋（伊勢） 瀬田橋 十綱橋

大原里 鳴海（但「初学抄」の鳴海里なし）

玉井（山城）

この一覧を集計してみると、次のようになっている。

古今集 七八

後撰集 三九

拾遺集 四〇

後拾遺集 二五

金葉集 二〇

古今六帖 三六

堀河百首 二一

さすがに『古今集』初出が、もっとも多い。『後撰集』以下は漸減のかたちとなっている。勅撰集の相いつぐ撰進の間に、『古今集』を基盤として平安時代の名所の形成があった。それは、三代集を経過した時点で、かなりの定着部分かみいだされた。「所名」の採択も、やはりその歴史的な事実に基づいていたと思われる。その間に位置する『古今六帖』は三代集に次ぐ数字を示しているが、地儀二帖が注目されたからであろう。また『堀河百首』は名所詠に出色な一面をみせたが、

それからの採扱は、「所名」の進取な一面といえる。とくに、そこにみられる京師周辺への関心は、充分に承けつがれて、名所史の上に新たな機運をもたらしているようである。

なおこの一覧のほか、諸家集より採られた名所群がかなりの数にのぼっている。『曾丹集』の鳴滝(山城)與謝海(丹後)、『重之集』の血鹿海(肥前)、『元真集』の衣川(陸奥)、『実方集』の宇佐宮(豊前)、などがある。それにもまして目に立つのは、『散木奇歌集』初出の名所群である。歌論に、本格的な名所論議の先鞭をつけた俊頼である。『堀河百首』も、当初の段階では俊頼が推進者であった。新風への意欲すくなからぬこの先駆者が、注視されるのは自然の理といえるであろう。次の名所群である。

塩垂山(美作) わぶか山(紀伊、奇歌集は、わぶる山) 鳴尾松(摂津) いはでの関

(陸奥) いなむやの関(出羽) 有栖河(山城) 櫛田河(伊勢) 野島

(出羽) 絵島(淡路) 鳴海里(尾張) 玉井里(甲斐)

さらに、「所名」初出とみられるものが多数ある。国名註によって所在の推定されるものと、全くそうでないものが混在している。共通するのは大部分が、のちにも歌例のみいだされないのである。次の名所群である。

狭野松原(和泉) 日根松原(同) こやの松原(摂津) 人づまの杜

(山城) たまかの杜(同) たれその杜(同) 手くらの杜(摂津) や

なぎの杜(丹波) 衣手滝(山城) 袖河(山城) 恋瀬河(常陸) 衣河

(近江) 千歳河(筑後) ひとよ河(同) たのむの池(大和) つるか

めの池(同) ふたみの池(佐渡) とほちの池(讃岐) かつまたの池

(美作) ちくさの海(近江) 会瀬の浦(常陸) 浮島浦(同) ねぬな

はの浦(丹波) こひの浜(播磨) かすみの崎(武蔵) ほのみの崎

(紀伊) しのびの島(志摩) なぎなの島(陸奥) 與謝大島(丹後)

はなれ島(肥前) 轟橋(大和) ゆるぎの橋(伊予) 衣手里(山城)

筒城里(同) かざまの里(大和) とほちの里(同) やまなしの里

(下総) つきよしの里(美濃) おきみの里(播磨) 子安社(近江)

これらも進取な一面とはみられようが、所在の推定されるのは傍線をつけた一七ヶ所である。あとの二三ヶ所は不明というほかない。中で「たれその杜」は、三巻本『枕草子』(ほかに能因本に)に載るものである。そして「ちくさの海」のほかは、すべて『八雲御抄』が『初学抄』を証に採っているのである。

四

清輔の家集(書陵部蔵「唐」)には、四四四首が収められている。贈答歌関係の重家(317・324・338・421)・二条院(77・418)・降信(323)・俊成(334)・信西(404)・範成(432)など一九首を除くと、清輔の詠は四二五首である。その四季歌二二三首(春六〇夏三三秋九五冬三七)に、名所の歌四七首(春一三夏一六秋一六冬一三)が含まれている。また恋以下の二〇二首(恋七六祝二〇離別一縁旅二長三七)には、四〇首(恋一三祝一八)が含まれている。名所は四季歌で平均二二%、非四季歌では一九%である。平均を超えるのは、祝三五%・冬三三%・雑二三%であ

る。中では冬歌が注意されるが、全般的には比率上とくに高いとはいえない。まずは一般の水準を示したといっている。

問題となるのは、使用された個々の名所である。勿論、その大部分はすでに歌界に定着した名所である。妹背山(20119)小倉山(197)小倉山(316)音羽山(2)小野山(4216)姨捨山(129)帰山(49)信夫山(255287)初瀬川・初瀬山(34162374)富士山(78200)伏見里(148)三笠山(397)武蔵野(109)み吉野・吉野山(4143198)などが詠まれている。

しかし、一方では知名でなく、使用例の稀なものがすくなくない。浅葉原(234)安蘇河原(214)今城岡(312)風越峯(69217)川島(86)気色杜(176)白月山(166)袖師浦(141)羽易山(201)横野(149)などである。

浅葉原は、浅葉野の詞で『万葉集』(未詳2763人麻呂歌集2863)に二首が載る。所在は未詳で、『五代集歌枕』(巻上)は国名註を欠く。武蔵(埼玉県坂戸市浅野)また駿河(静岡県磐田郡浅野町)とされる。勅撰集の入集はなく、浅葉野が『匡衡集』(64)以下、『郁芳三品集』(221366)『拾遺愚草』(959)『玉吟集』(2349)に散見される。浅葉原では『散木奇歌集』(1191)一首だけである。

安蘇河原は『万葉集』(未詳3403)の一首が先例である。『五代集歌枕』(巻下)『八雲御抄』は、ともに下野(栃木県佐野市及び安蘇郡)とする。頼政(源三位280)に詠まれるだけである。次の今城岡も、やはり『万葉集』(未詳1944)に一首が載る。所在は大和(奈良県吉野郡大淀町今木)とみられるが、『五代集歌枕』(巻上)は国名註を欠き、『八雲御抄』が紀伊とする。顕季(六条修理70)顕仲(元永元年)に詠まれるにすぎない。

風越峯は、兼昌(永久三年忠通前度歌合)が先例である。『詞花集』(雑下386)に載り、

『千載集』(夏158)には清輔(69)の一首が採られている。しかし、ほかには西行(山家集83)教長(前参議教長卿集144)など、数首がみられるだけである。ついで川島は『古今六帖』(藤原うかぶの卿三三九一二)が先例である。『初学抄』『八雲御抄』ともに摂津(大阪府枚方市上島)とする。『千載集』(巻四863)『江帥集』(362)のほかは、一、二にすぎない。気色杜も『古今六帖』(三三二)に載る。『赤染衛門集』(125)『和泉式部集続集』(1368)にみられ、勅撰集では『千載集』(秋上待賢門院堀河227)『新古今集』(良経270)に載った。ほかは、『秋後月清集』(1852)『順徳院御集』(1153)などわずかである。『初学抄』『八雲御抄』が、ともに大隅としている。

白月山は、『万葉集』(未詳3073)が出拠である。『五代集歌枕』(巻上)『八雲御抄』は、ともに近江とする。『近江輿地志略』には見えない。顯輔(左京大夫天長元年92)季経(季経入道集42)などにみられるだけである。袖師浦は『五代集歌枕』(巻下)が伊勢、『八雲御抄』が出拠としている。『後拾遺集』(恋一660)が先例である。勅撰集はこの一首だけで、あと『散木奇歌集』(883)『大宰大貳重家集』(33)にみられる程度である。

羽易山は『万葉集』(未詳1827)に載る。「春日なる羽がひの山」とあり、奈良市春日の地内である。『五代集歌枕』(巻上)は大和、『八雲御抄』は「大和、春日也」とする。清輔も『奥儀抄』(上、廿五・出万葉集所名)に、「はがひの山 春日ニ有」としている。『柿本人麿集』(76)『あか人』(14)にはそれぞれ異同があるが、万葉歌が採られている。ほかには、『藤原隆信朝臣集』(49)にみられるにすぎない。続く横野も『万葉集』(未詳1825)である。『五代集歌枕』『八雲御抄』はともに上野とするが、摂津・式

内横野神社(大阪市生野区)の地とも解される。『柿本人麿集』(72)に万葉歌が採られている。あとは『山家集』(1015)『長秋詠藻』(8)『土御門院御集』

(26)『玉吟集』(12)の四首にとどまっている。

さらにこれに類するものに、明石瀬戸(金葉190千載313公実俊恵)諏訪海(堀河百首源998)

糺杜(新古今1220定文)引馬野(万葉長忌寸奥麻呂57仲実堀河百首1239)平野(拾遺264能宣)などがある。やはり作例がすくない。

このように家集の名所には万葉歌を典拠とする場合が目立ち、一般の作例も少数となつている。六条家の人らしい一面といえるが、また『散木奇歌集』『堀河百首』も意識されているようである。家集の名所数は「所名」記載の約二割という事情もあり、前述初出群の中で詠まれている例はない。その反面、右の例に触れたように「所名」未見のものもかなりある。学書と家集との相異ではあるが、姿勢や意識の上では多分に共通するものがあるようである。それは次の「読習所名」にも、明らかに反映していると思われる。

五

「読習所名」は、素材と名所との関連を示したものである。素材そのものは、歌語註の形ですでに先行書に扱われている。『能因歌枕』は雑纂的で内容が充分に整っていないが、例をあげると次のような一条がある。

若菜とは、あぐすみれ・なづかなどをいふ、さわらびをいふ

『綺語抄』になるとかなり組織化されている。「読習所名」に扱われる素材は、全一四部の中で天象・時節(上)・植物・動物(下)の各部

が該当する。歌語に即して証歌をあげ、簡略な註を加えている場合が多い。中には次のように、名所との関連の説かれている例もある。

梶

みわのやま、しるしのすぎ、人のやどたづぬるによむ、或説、むかし三輪明神すみよし明神にすてられてよみ給へる歌にいはく、こひしくはきてもみよかしちはやぶるみわのやまもとすぎたて
る門

とよめる歌を本文にて、いまの人その心をよむ也(植物部)
『和歌童蒙抄』になると組織化・体系化はいっそう進み、全一〇巻の中で巻一より巻九までが歌語註にあてられている。二・三部の構成で、それをさらに細分して、『万葉集』以下の諸撰集、その他にみえる古歌を引用して註を加えている。註解は故実を交えて、細分の各条とも精しくなっている。中で該当するのは天(巻二)・時節(巻二)・漁獵(巻七)・草・木(巻八)・鳥(巻九)などの各部である。ここにもやはり次のような例がある。

霧

わがゆゑにいななげくらし風早のうらのおきつに霧たなびけり
万葉集第十五(末詳3615)にあり、風早の浦は伊予国に在(天象部)

『初学抄』では「秀句」「物名」の一部がそれにあたる。名所との関連では、次のような例がある。

馬 マダヲヲノコマ タツノ馬 アチ馬(中略) ヲブチノ駒 モチ
月ノコマ キリハラノコマ タチノコマ ホサカノコマ

アシブチノトラゲノコマ(物名)

「ヲブチ(尾駮)ノコマ」は『奥儀抄』(中・釈、後)に『後撰集』(雑四

1253)を引き、「陸奥にをぶちと云ふ所よりいでくる馬をいふ也」とあ

る。『袖中抄』(第卅)では、「奥州にをぶちと云所の名聞えず、たづぬべ

し」となっている。『奥儀抄』所引の『後撰集』のほか、『後拾遺集』

(相模955)にも「みちのくのをぶちの駒」の詞がある。『八雲御抄』は牧

に採り、証歌を欠くが陸奥とする。望月(信濃後撰1145)同拾遺438(拾遺170)桐原

(同拾遺169)穂坂(甲斐堀河百首769・同隆源781)は、いずれも『延喜式』(卷四八左に

載る官牧である。

また『初学抄』には「喩来物」の一項がある。『能因歌枕』にも一
部の先例があるが、なかなか当を得た用意である。その全四一条の中
に、名所に関連するものが一六条含まれている。

ふるき事には ナガラノハシ イソノ神 フルノヤシロ

とあるのは、その一例である。

しかし、先行書以来の伝統の様式である歌語註、またこの「喩来
物」は、直接に名所との関連を説くのが目的ではない。関連する限り
で、名所に触れられているのである。その点、「読習所名」は端的な
形で、景物と名所とが結ばれている。

その前書きに、

又花さかぬのべに花をさかせ、紅葉なき山に紅葉をせさするは歌
のならひなれば、ものにしたがひてよみならはしたる所のあるな
り

とあり、後書きには、

つねにかやうの所をよむべき也

と記されている。名所は主に「もの」(景物)との関連で、歌語の世界
に普遍化された。それが基本の制約となり、それぞれ詠み継がれてい
る。「つねに」その「よみならはしたる所」に、作歌上の創意がかけ
られてきたのである。したがって、その名所への慣熟は初学の要諦で
あらう。「読習所名」は、名所理解の指標を心がけたものとみられ
る。

記載の名所は、次のとおりである。

大和 朝原 磐瀬野 磐余野 宇陀野 春日野 春日標野 春日

山 立田山 都介野 飛火野 奈良思岡 三笠山 み吉野

三輪山 吉野山

山城 化野 嵐山 稲荷山 宇治川 大井河 大原山 小倉山

音羽山 小野山 笠取山 桂河 嵯峨野 長坂 柞杜 広

沢池 松ヶ崎 八入岡 淀野

河内 交野 渚岡

摂津 明石浦 生田杜 住吉 住吉ノ岸ノキハ 高砂 玉河里

玉江 タマサカ山 津ノ国 難波 難波江 待兼山 三島

江

駿河 富士山

甲斐 甲斐白根

武蔵 武蔵野

近江 栗津野 志賀ノ山越 田上河 筑摩江

信濃 姨捨山 更科

陸奥 安積沼 宮城野

越前 越ノ白山 叔羅河

越中 鵜坂河 咲田河 売比河

未勘 雁羽小野

計六五ヶ所である。山城一八・大和一五・摂津一三以下九ヶ国にわたる六四ヶ所と、未勘一ヶ所となっている。畿内が多い。これらが霞以下の「もの」二二条に配されるが、磐余野・み吉野・吉野山は重出している。またこの中で化野・磐瀬野・磐余野・鵜坂河・雁羽小野・咲田河・都介野・長坂・松ヶ崎・売比河・八入岡の一ヶ所は、前述「所名」にみられない。この一覧は未勘を含むことに象徴されるように、必ずしも知名でないもの、「もの」との関係に妥当を欠く場合もある。それだけに新見もすくなくないようである。

霞ニハ ミヨシノ アシタノハラ

月 ヲバステ山 サラシナ ヒロサハノ池 アカシノ浦

雪 ヨシノ山 フジノ山 ヨシノ白山 カヒノシラネ

花 ヨシノ山 シガノ山ゴエ

紅葉 タツタ山 アラシノ山 ヲグラ山 ヤシホノヲカ ハハソ

ノモリ

松 ミカサ山 春日山 住吉 タカサゴ

相 ミワノ山 イナリ山

若菜 春日ノシメノ トブヒノ

郭公 オトハ山 タマサカ山 マチカネ山 ナラシノヲカ イク

タノモリ

これらの各条は、概して妥当な例である。多少の註を加えると、霞のみ吉野は『後拾遺集』(春上¹⁰部)に初出、ついで『堀河百首』(顯仲⁴²)がある。のち『拾遺愚草』(9154⁹⁴⁴⁸9949)などがあるが、み吉野の霞は作例がすくない。なお吉野山では『拾遺集』(春上⁴同³⁷部)に初見されるが、やはり限られている。『枕草子』(「原は」)に載る朝原は、『金葉集』(春⁶長⁶)が初出である。歌合の方がはやく、長久二年二月(一〇四二)『弘徽殿女御生子歌合』に相模がある。また『堀河百首』(河内⁴⁸)にみられ、『千載集』巻頭には俊頼がある。家集類にもかなりの詠がある。月では姨捨山・更科も、前述のように賞美する方に傾いている。広沢池は『能因法師歌集』(78)に冬月が初出、『風情集』(58⁴⁰²)を経て、『拾玉集』(29²⁶¹920¹³⁴⁷1659²¹⁹³2329³⁰³⁰)にもつとも多い。そのほか、『秋篠月清集』(66³³⁴1215¹³¹⁴)『明日香井集』(505⁹⁵³)『拾遺愚草』(835¹⁶¹³)などの家集に占められ、春月・秋月よりも冬月が関心されている。明石浦では舟(古今⁴⁰⁹)の先例があり、千鳥(堀河⁹⁷⁸同⁹⁸⁰部)も材とされるが、やはり月が多い。『後拾遺集』(嵯⁵²³旅⁵²⁴)の資綱・絵式部の贈答が初出となっている。『堀河百首』(肥¹⁴²²)『散木奇歌集』(487⁷⁷³)以下が続く。明石沖(千載²⁹⁰)、前述の明石瀬戸(公¹⁹⁰実¹⁹⁰)も月が中心である。「月影のあかしの浦」(堀河^{百首}前^述)「有明の月もあかしの浦風に」(金²²⁹業²²⁹)と、秋月が主になっている。

雪では富士山である。一般には「思ひ」(古今534)「煙」(後撰1015同1016)との所縁が濃い。それを踏まえて『重之集』(293)『相模集』(浅野家375)に、雪が登場する。清輔(77)にも一首ある。紋景に重心が傾くのは『閑谷集』(232)以降で、『郁芳三品集』(473)『捨遺愚草』(983)『後鳥羽院御集』(1446)などがある。富士高根では『古今六帖』(三二六、のち『新古今集』(冬人675)がある。富士山・富士高根ともに、雪は意外にすくない。次に甲斐白根は作例が多くないが、『拾遺集』(紀伊式部404)以下、ほぼ雪一色となっている。

花の吉野山は『古今集』に友則(春上60)、譬喩とする貫之(恋二588)があるが、顕著になるのは『拾遺集』(春上37同41)以後である。また名所に準じる志賀ノ山越では、『永久百首』での撰題(春)が大きい。

紅葉の嵐山は『拾遺集』(公任210)が初出となっている。小倉山では鹿(古今439同1102)が先例である。「夕月夜をぐらの山」(古今312)の「を暗し」も絡んで、郭公(後撰196)花薄(古今六帖三四五五〇)雁(古今六帖三五二一)深養父(496)など、鹿以外に歌材が多い。紅葉では、初出の『拾遺集』(雑秋1128)忠平が知られる。同集(夏115)には待紅葉の詠もある。以後、紅葉は鹿と二分するほどになっている。次の八入岡は、『大納言公任集』(154)の贈答に載る道長女御匣殿の例がはやい。続いては『堀河百首』(顯季853仲実855)がある。しかし、勅撰集未見で、作例はすくない。柞杜は『後拾遺集』(秋下342)が初出、『散木奇歌集』(5951045)などがある。なお「所名」には衣笠岡(山城・紅葉・花・錦)の例があるが、この条に採られていない。

松では三笠山である。先例の月(仲磨今406)が承け継がれる一方で、懸

詞的な連想で雨(後堀1030)との所縁も多い。松は延喜二一年(九二二)『京極御息所褒子歌合』に初見、ただ後統は下って『江帥集』(93)『六条修理大夫集』(111112)となる。清輔(397)にも一首がある。あとは、『長秋詠藻』(539)『秋後月清集』(132515201582)『明日香井集』(1638)などが散見されるにとどまる。

梶の三輪山は、『古今集』(雑下982)が初出となる。前述『綺語抄』を承けて『和歌童蒙抄』(巻八木部杉)があり、清輔は『奥儀抄』(中・釈・後撰集廿五)にも「杉のしるしなどよむ事はこの歌(古今)より始れるにや」と註している。のち『袖中抄』(第九)に、やはり一条がある。稲荷山は『古今六帖』(三七七)が初見である。『枕草子』(二四七段)の稲荷詣にはとくに山上の杉の記述はないが、『更級日記』初度初瀬詣(永承元年十月)に載る。「所名」の「神マススギアリ」の註のように歌では主材に扱われている。

若菜では春日野(古今22)飛火野(同16)が著名である。しかし、春日ノ標野はあまり例がない。『万葉集』(末詳3050)に「春日野に浅茅標結ひ」の詞がある。これを含めて、同集の「標」十余例は相聞に用いられている。平安以降では『新古今集』(春上12)にみられる。また『実方集』(88)に春日原の標野の一例がある。なお名所を含まぬ「若菜↓標野」に、やはり『新古今集』(春上11同万葉1427)がある。

郭公の音羽山は『古今集』(秋上142同別256)である。地名の「音」との縁で秋風(同256)春のことぶれ(後拾遺4)の例もすくないが、主材はやはり郭公である。作例は多い。タマサカ山は保安二年閏五月(一二二)、『内蔵頭長実歌合』(能登)の一首だけである。この名所による作例は、

ほかに二首がみられるにすぎない。『能因歌枕』も撰津とするが、『八雲御抄』は「撰津国之由、清輔抄」とあり、所在に疑義があるようである。待兼山も作例はすくなく、『古今六帖』^(三二七)以来、材は呼子鳥が中心である。『八雲御抄』が証とする肥後^(詞花 45 八首 223)も、同様である。郭公は嘉保元年(一〇九四)『前関白師実歌合』の周防内待^(新古今 205)、『頭綱朝臣集』⁽³⁸⁾の二首にとどまる。その点、奈良思岡は初見の『万葉集』^(大伴田 1506)以来、郭公が大勢を占めている。『拾遺集』では郭公^(雑春 1077 八村大磯)のほかに、呼子鳥^(恋三 819)も詠まれるが、後続はすくなく。所在は大和であろう。それを『五代集歌枕』^(岡上 205)とし、「私云此岡在大和国歌作例尤多」と付記する。『八雲御抄』も土佐と記される。『能因歌枕』の「土佐、ならしの山」が響いているようである。続く生田杜の郭公は、前述『前関白師実歌合』^(通俊)にみられる。ほかには『六条修理大夫集』⁽⁵⁰⁾『寂然法師集』⁽²⁷⁾『後鳥羽院御集』⁽¹⁴⁸⁸⁾『如願法師集』⁽⁴⁴¹⁾などがある。歌材上目に立つものに秋風^(詞花 81 露 後鳥羽院御集 1418)もある。『後鳥羽院御口伝』の定家難に知られる「秋とだに」^(愚草 1927)も、同系の秋色である。

こうしてみると、妥当とした各条の中にも、名所例として知名度・定着度の点でやや疑問のあるものもある。一面には『堀河百首』『散木奇歌集』に代表されるように、近來の作例が視野にあった。その限りでは、清輔の先駆的な知見をうかがうことができる。後続歌に反映している場合は、確かにある。しかし、保守的、固定的な視方も否定できない。初学への配慮という面では、やはり一考される要はあるよ

うである。次のような例になると、その感が深い。

鶺鴒河 オホ牛河 カツラ河 ウサカ河 サキタ河 山ヒ河^{イ(ヒト)} シク

ラ河

氷室 ツゲノ ナガサカ マツガサキ

とある二条である。鶺鴒河は『永久百首』に撰題(夏)され、『金葉集』以後季題に加えられている。ここでの採択も、その機運に投ずるものである。問題となるのは、ウサカ河以下の名所例である。「山ヒ河」は、先の一覧では売比河とした。『五代集歌枕』^(河下)の、

めひがは 売比河^(証歌、万葉 4023)

うさかがは 鶺鴒坂^(同 4022)

^(イ)サミツガハ いみづがは ^(同 4150)

さきたがは 辟田^(同 4157 4158)

と越中所在の河を連ねた部分に拠ったとみられる。中で売比・辟田両河の証歌には、鶺鴒が詠まれている。鶺鴒坂河をも加えたのは、河名の「鶺」に触発されたからであろう。平安以降の作例では、辟田河が『讃岐集』⁽³¹⁾にある。また『堀河百首』仲実の^(盤 471)の初句「うさや河」に、「うさか河」の異伝が知られる。材は篝火となっている。売比河の例はない。以上の三河は、『八雲御抄』も越中とする。終りの、同じく鶺鴒^(万葉 4189 家持 4190)を材とする叔羅河は、『五代集歌枕』に記載がない。『八雲御抄』は備中とするが、『延喜式』^(卷二八 兵部省)「越前国駄馬」条に「淑羅」^(福井県武生市付近)の名がみえる。この河も平安以降に作例がない。『奥儀抄』^(上 廿五)が「出万葉集所名」にこれらをすべて^(売比河はヒメ川として)載

せるのは、さすがである。『初学抄』の「万葉集所名」には鵜坂河だけである。これらの河は、明らかに特殊である。京師周辺の知名な大井河(金葉160)桂河(新古今254)とは、比較にならない。この一条の名所例は、当を得ているとはいえないようである。なお桂河は作例がすくなく、鵜河も右の一例だけである。

次に氷室は、『堀河百首』の撰題(夏)がもととなっていたとみられる。氷室は『延喜式』(巻四〇)に記されている。大和の都介野は、『日本書記』(紀)に載る濫觴の地である。長坂・松ヶ崎は山城である。長坂は愛宕郡氷室五ヶ所の一、「土坂」とあるのがこの地の誤記とされる。松ヶ崎は同郡栗栖野氷室にあたるか、仔細は未詳である。同百首には、都介野(仲実519)長坂(国信515)松ヶ崎(顯季517肥後526)がある。氷室題一六首の中で、名所の詠はこの四首にとどまる。あとは「氷室山」の詞となっている。この百首歌を除くと、長坂氷室が『如願法師集』(371)にみられるだけである。都介野の詠はなく、松ヶ崎も「松」「たづ」を材とする『拾遺集』(神業歌607)の先例が響いているようである。氷室では多くが「氷室山」(3)(千載208)の詞に傾き、固有名はなじまなかったように思われる。清輔の用意もあまり有効ではなかったといえる。

鵜河・氷室のほかにも、個々の名所例にこれに類するものがある。女郎花の磐余野(源三位247)、同じくみ吉野(散木集398)である。鷹狩に磐瀬野(河)百首題1061(仲実1063)宇陀野(同千載420)がある。同条の雁羽小野は『万葉集』(未詳)3048を出拠するが、『八雲御抄』が「名所歟、只狩する所歟」と疑っている。勿論、作例はない。また炭竈には笠取山(金葉527)がある。以上は

雁羽小野の場合は別としても、すべて稀少例がみられるにすぎない。和歌史の経緯からみても、掲出は不審というのが適当である。

「読習所名」は名所理解の捷徑を提示したとみられるが、それにそぐわない部分がかなりあるようである。前書き・後書きにもかかわらず、作歌例がそれを否定する名所も混在している。また列記の「ものは四季の材との想定であろうが、「所名」をみると、さらに幾つかの増補が可能である。葵―神山(山城)、松―小塩山・大原野(同)、駒迎―桐原・望月(信濃)・穂坂(甲斐)、時雨―守山(近江)、稲舟―最上河(出羽)などがある。このほか、呼子鳥(大和、磐瀬社)、山吹(大和、吉野河)、照射(陸奥、宮城野)、鵜(山城、深草里)、千鳥(大和、佐保河)なども加えられよう。

このようにみると「読習所名」は、なお吟味の余地があるようである。それは「所名」が進取な一面を示しながら、往古の面影を揺曳しているのに似ている。六条家歌字が髣髴するのである。近來の作例に着目しながらも、名所の認識の上で充分に資としきれない部分が纏わっている。名所は取捨され、次第に視覚的な叙景空間への方向が兆している。『初学抄』は一步を進めながらも、基本的なその要事への対応にやや欠けるところがあるようである。実情は固定的な名所観が重く、新たな歌の世界の創出への姿勢が弱いといえるのである。

1 拙考『能因歌枕』の名所記載(跡見学園国語科紀要33)

2 同「志賀の山越小考」(同21)

3 同「氷室山歌考」(同25)

(小稿は昭和五九年度学園特別研究費による研究の一部である)